

## 友達関係、人間関係をうまく築ける子どもに育つために、親ができること



臨床心理士 川田行雄



「人」という文字をみてもわかる通り、ひとりぽっちで生きていける「人」なんておりません。また集団の中「人の間」にいるからこそその「人間」です。ひとは誰かに支えられてはじめて「人」になれる、うまく人間関係や友達関係がもてる人ほど、「人間」的で「人」として豊かであるといえるかもしれません。

子どもを育てるのは親の役目です。親は子どもの幸せのためならなんでもしてやろうと思えます。できるだけ早く子どもを「教育」しようとするのも、より優れた「人」になってもらいたいと願う親心です。人間関係や友達関係などの育ちは、「良い」環境に入れることで形成されると思うから、親はそういう「環境」を子どもに準備してやるのが、親のできることだと考えます。

この考えはもっともなことのように思えますが、実は、まず親が子どもにしてやれることの一歩は、外からの教育や外的な環境を整えるということではありません。なにをおいても親がしてやらなければならないことの第一は、まず「親」や「家庭」という良い「環境」を子どもに提供することなのです。

赤ちゃんは生まれた瞬間からひとりぽっちではありません。これは野生の哺乳類の親子をみていればわかります。母乳(親)にくっついていなければ生存できないからです。これをアタッチメントと呼びます。人の場合、子どもの方からくっついてこれなくて、赤ちゃんに泣いて呼ばれたときに、親が抱っこして授乳してやらなければならないので、アタッチメント(愛着)が成立するために約半年余りを要します。

人を育てるといのは、ですから非常に労力を要するわけですが、これは親にしかできないことです。そして愛着関係の確立が、その後の人間関係や友達関係がうまくもてるための第一条件となります。人の気持ちがわかるという共感性は、親子の一体関係の中で学ぶからです。「おかあさんじゃなきゃダメ！」と親をハイハイで追いかけ出せばしめたものです。親から、感情だけではなく、歩行や言葉も自然にまねて成長していけるようになります。

おおむね1歳で歩けるようになると、今までの親子一体関係から、1歳半のイヤイヤ期をへて、親子(二者)関係が2歳のお誕生ころからスタートします。この時期も愛着関係は健在ですので、子どもは大人をまねて、動作(しつけ)や対話(コミュニケーション)を模倣により学びます。親がこころがけたいのは、情緒面も含めてそれぞれによいお手本となってやることです。「してみせて、言って聞かせてやらせてみせて、誉めてやらねば、人は育たじ」ということです。

2歳代の二者関係が、その後の子どもの対人(人間)関係の基礎となりますので、もっとも子どものそばにいる人の役割はとて大きいということになります。3歳の半ばをすぎれば、子どもは親との愛着関係から離れて、集団(友達)関係に向かうようになりますが、実はこの時期を過ぎても親のしてやれることは大きいのです。

それは子どもの集団関係の基礎になるのは、家族関係だからです。たとえば下に弟妹が生まれていたら、下の子のお世話をする親のまねをさせることです。そうすれば、よい兄姉になってくれて、友達とも上手に遊べるようになっていくわけです。●●✦●●●✦●●●✦●●●✦●●●

子どもの対人関係や友達関係、人間関係を育てるのは、親の良いお手本だといえると思います。